

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

比較文化論：複数の項目にまたがる研究：
婚資，農耕，親族の相関関係

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003675

婚資，農耕，親族の相関関係

須 藤 健 一*

1. 婚資と生業の関係

2. 婚資と親族組織との関係

本章では、大項目、結婚にふくまれる小項目のなかで婚資（3204）をとりあげ、それと生業および親族組織との相関性について考察する。筆者は第2章で、アフリカ社会を中心とした婚資の人類学的研究の概略について述べておいた。その研究の結果、アフリカ社会では、婚資が牧畜民のあいだで発達し、それにくらべると農耕民社会では重要性が低いと指摘されている。また、婚資は、父系出自集団、夫方居住婚、レヴィレート婚、一夫多妻婚といった制度とも機能的に適応することが明らかにされた。そのような婚資とほかの文化要素との相関性は、「女性の性的、生殖能力および労働力」にたいする代償という婚資の性格を特徴とするアフリカ牧畜民社会だけにみられる現象であろうか。ここでは、東南アジア・オセアニア地域での婚資の性格を、分布様態の検討をとおして考察してみたい。

1. 婚資と生業の関係

東南アジアからオセアニアにかけては、牧畜ないし遊牧を生業とする民族は存在しない。したがって、ここでは、農耕民、採集・狩猟民（1113）と漂海民（1220）をとりあげ、婚資（3204）の存在の有無を検討する。農耕民の生業を指示する項目として、タロイモ栽培（1301）、水稻栽培（1310）、焼畑耕作（1312）を選定した。婚資の項目をもつ民族数の多い順にならべると、焼畑耕作117例、タロイモ栽培96例、水稻栽培67例、そして採集・狩猟民では13例で、漂海民には存在しないということになる。ただし、タロイモ栽培をおこなう143民族で、同時に水稻栽培をするのは42民族、焼畑耕作を有するのは97民族と栽培植物に重複がみられる。

* 国立民族学博物館第1研究部

つぎに生業べつに各民族数と婚資をもつ民族数との割合をだしてみよう。焼畑耕作をおこなう民族150のうち婚資の慣行が存在する例は、117でその割合は78%となる。また、水稻栽培民89民族では75%、タロイモ栽培では67%、採集狩猟民20のうち13例で65%、そして漂海民 (Bugis と Moken の 2 例) では 0% という数値を示している。ここで注目されるのは、水稻耕作民よりも焼畑耕作民の方が、民族数と割合の両方で婚資との関係が「強い」という点である。大きな数値を示しているのは注目される。

つぎに、婚資 (3204) とブタ飼育 (1321) の関係をみると、ブタを飼育する民族174例のうち124の民族が婚資をもつ。それら 2 項目の組みあわせだけでは、ブタが婚資として支払われるか否かは速断できないが、ブタを飼育する民族の71%が婚資をもつという高い数値を示している。

2. 婚資と親族組織との関係

アフリカ社会においては、婚資が父系出自に適合する制度であることは前述したが、東南アジア、オセアニア社会においては、婚資と出自の関係がどうなっているかを検討してみることにしよう。ここでは、それらにくわえて居住様式との関係についても考察してみる。

婚資と出自との関係で、婚資のある163民族のうち、出自が判明している民族は160民族である。そのなかでもっとも多いのは、婚資 (3204) と父系出自 (3306) のつながりで、90の民族例を数える。その数は、父系出自をもつ民族数112のうち、80%にあたる。つぎが婚資 (3204) と双系出自 (3309) で、40民族であり、双系出自社会 (60例) の67%をしめる。婚資 (3204) と母系出自 (3307) の組み合わせは24例で、44の母系社会の55%にあたる。以上のことから、婚資の発生率 (各出自体系をもつ民族の数と婚資の存在との比率) をみると父系、双系、母系の順になる。この順序をグディ (Goody, J.) が *Atlas of World Cultures* の資料に基づく406社会の分析結果 (父系72%、重系52%、母系37%、双系19%) とくらべてみると、東南アジア・オセアニア地域では、双系社会における婚資の出現率の高さが指摘できる。

婚資の性格が、前述したように夫側から妻側への財の支払いであり、それによって妻が夫の集団へ「移動」することである。したがって、婚資は婚後の居住様式に密接に関連してくる。そこで、婚資、出自と居住様式の三つの項目間の相関関係をみることにしよう。婚資 (3204)、父系出自 (3306)、夫方居住 (3310) の3項目を共有する民族は74を数える。この例数は、夫方居住をする民族124の60%にあたる。婚資(3204)、

双系出自 (3309), 夫方居住 (3310) は15民族で, 夫方居住をする民族にしめる割合が12%である。つぎに, 婚資 (3204), 母系出自 (3307), 夫方居住 (3310) の組み合わせも15民族にみられる。それにたいし, 婚資 (3204), 母系出自 (3307), 妻方居住 (3311) の存在する民族数は9例で, 妻方居住様式をとる民族64の14%をしめるにすぎない。

以上のことから, 夫方居住様式をもつ民族124例のうち81%, 100の民族が婚資をもつことが明らかになった。それに比べ, 妻方居住の民族における婚資の出現率は14%ときわめて低い。したがって, この地域においても, 夫方居住と婚資との相関関係の強さが指摘される。

つぎに, 婚資, 父系出自, 夫方居住の3項目が存在する諸民族の分布様態を検討してみよう。それらの地域で3項目をもつ74民族のうち, 22例が東インドネシアをはじめとするヘスペロネシアン, 16例がアッサムからビルマにかけてのチベット=ビルマ, 15例がニューギニアのパプアン, 9例がメラネシアンとつづく。モン=クメール, ミャオ=ヤオ, タイといった語族のあいだではいずれも2例とすくない。また, オセアニアでもポリネシアンに2例みられるだけで, ミクロネシアンには皆無である。婚資の項目をもつパプアン22民族のうち, 婚資, 父系出自, 夫方居住の3項目をもつ民族が15例, またチベット=ビルマの26民族のなかでそれら3項目をもつ民族が16例を数える。

さらに, 婚資 (3294) と一般交換 (3315), 婚資と身分階層 (3502) の項目の組み合わせをとりあげてみよう。一般交換はMBDとの規定的縁組みをさし, 45の民族に存在する。そのなかで婚資の項目を共有する民族は33例を数える。そして, 婚資と一般交換の項目をもつ33民族のうち, 25の民族は父系出自, 夫方居住の項目をも共有する。つぎに, 婚資 (3204) と身分階層 (3502) の項目をもつ74民族の性格をほかの項目と関連させて考察してみよう。それらと生業との組み合わせでは, 焼畑耕作が49, 水稻耕作が36, タロイモ栽培が39を示す。身分階層 (3502) と焼畑耕作, 水稻耕作, タロイモ栽培との組み合わせをみると, 水稻耕作が53%でほかの2項目はいずれも41%である。したがって, 婚資と身分階層の項目は, 生業形態とのあいだに, きわだった結びつきがないようである。婚資, 身分階層と出自の組み合わせでは, 父系が36, 双系22, 母系12となる。このことから, 婚資, 身分階層, 父系出自の項目の相関関係の強さが指摘できる。

最後に, 結婚 (3200) の項で指摘した結婚の小項目間の組み合わせからの問題点についてふれておく。つまり, 婚資 (3204), 一夫多妻制 (3206), 幼児婚約 (3201), 婚

前性交の禁止(3202)と労役婚(3205)とを共有する Rengma Naga, Pulang のグループと、前4項目を共有しながらも労役婚が欠如し、仲人(3203)をもつ Lisu, Sumbanese, Mandaya のグループとの対比についての問題である。それら5民族を、出自、居住、生業との項目で比較してみると、Rengma Naga と Mandaya が父系出自(3306)、夫方居住(3310)、焼畑耕作(1312)(ただし、Rengma Naga は水稻栽培もおこなう)を共有する。Sumbanese は、父系出自、妻方居住(3311)、採集・狩猟民(1113)、Pulang は出自不明、母方居住(3311)、採集・狩猟民、Lisu は出自不明、水稻栽培・焼畑耕作という結果になる。このことから、結婚項目間の組みあわせから抽出された、二つのグループは、出自、居住、生業というほかの大項目との組み合わせでは、対立する分類がみられない。したがって、一つの大項目内での小項目間の相関と対立の特徴を、ほかの大項目と結びつけて明らかにするためには、項目間の機能的・構造的整合性を把握したうえでおこなう必要がある。